

序章 ハザールとは何か

ロシアの昔話にユダヤの荒武者

ロシアにブイリーナ¹という昔話のジャンルがある。十世紀以後のロシアの歴史を反映する英雄・豪傑の武勇や冒険を面白おかしく朗唱する語り物である。十八世紀末、十九世紀初頭ロシア北方で識者によって発見され、民衆文芸として注目され、収集が広く行われた。発見収集時は農村・地方都市で謡れ、民衆は聴いて、楽しんでいたようだが、前世紀中頃には伝承者が絶え、今や活字の書としてのみ伝わる。

その一つ、キーウ（キエフ）に古いロシアの中心があった時代を背景とする「イリヤー・ムーロメツとジドビン」という一篇を紹介したい。長いので、ただ、あらすじだけ。たわいのない昔話と思わず読んで頂きたい。おやと思われる個所があると思われる。

都キーウ（キエフ）を守るため、町を囲んで出城があった。一騎当千の勇者達が守っていた。主将はイ

リヤー・ムーロメツ。その下にドブルーニヤ・ニキテイチ。またその下にアリヨシヤ・ポポビチ、グリシヤ・ポヤルスキー、バシカ・ドルゴポルスキー。

ドブルーニヤが狩に出た。見ると野原に巨大な馬のひずめあと。炉の半分もあるひずめあと。どんなでかい荒武者あぶひしゃが馬を走らせたのか。

ユダヤの地からジドビン（ユダヤ人）がやってきたのだ。怪力無双の猛者がキーウ（キエフ）の野にやってきたのだ。

ドブルーニヤは取って返し、勇者たちに言った。

「ぼやぼやしている場合じゃない。出城の横をかすめてユダヤの騎士が通ったぞ」。

勇者達は考えた。誰をユダヤ人退治に差し向けるか。

バシカ・ドルゴポルスキー、グリシヤ・ポヤルスキー、アリヨシヤ・ポポビチの順で名があげられたが、イリヤー・ムーロメツは三人の衣服や性格上の欠点をあげ、がえんじない。

そこでドブルーニヤが武装して馬に乗り、ソロチンスクの山に駆け上がる。山からみると、ふもとの野原に黒い影。

ドブルーニヤは大声をあげ、黒い影に突進する。両者激突。激しく闘うと、ドブルーニヤの馬がひざをつく。すぐに立ち直るが、出城に引き返す。

「かくなる上は我しかない」とイリヤー・ムーロメツ、良馬にひらりとまたがり、ユダヤの騎馬武者に向かつて突進する。棍棒は割れ、サーベルは折れ、槍で突き合っても勝負はつかない。とうとう最後に取っ組みあい。組んず、ほぐれつの取っ組み合い。ついに、イリヤーはユダヤの騎士に馬乗りになり、短剣を出して、首をはね、槍の穂先にさして、出城に持ち帰る。

勇者達は歓呼の声をあげ、出迎える”。

ロシアの昔話にユダヤ人の騎士が登場する。キーウ（キエフ）城下に乗り込んでくる。それも遠くイスラエルからやってきたのではない。ついそこからやってきたように語られる。騎士の姿もヨーロッパ各地で類型された強欲な金貸しや小ずるいユダヤ人とはかけ離れている。軍馬にまたがり、棍棒をひっさげ、片刃の反り身の刀を腰にさげ、槍をたずさえ、ロシアの豪勇達にひけをとらずに激闘する。

どうして、ロシアの昔話にユダヤ人の騎馬武者が登場するのか。

ロシアの先行国家としてハザールというユダヤ教を信奉する騎馬民族国家があったからだ。

ロシアの先行国家といわれてもピンとこないかもしれない。もう少し、説明を加えたい。

ハザールとは

今、物議の種を世界に播くロシアに先行する国は、ソビエト連邦。ソビエト連邦の先行国家はロシア帝国（帝政ロシア）。ここまでは誰でも知っている。ではロシア帝国の直接の祖は何であろう。モスクワ公国である。

この国はモンゴル帝国（直接的にはキプチャク・ハン国⁽²⁾）の中から生まれでた小さな国であった。駿馬にまたがれば一日で端から端まで行きつけような狭い国であった。それが十六世紀中頃、イワン雷帝（一五三〇—一五八四。在位四七—八四）の治世、突如東西南北で領土拡張を開始し、中でも東方への征服行が突出し、十八世紀にはアラスカを領有し、十九世紀には我が国の隣国になるほど短期間に急成長を遂げる。その秘密はチンギス・ハンの遺産（国家の構造と精神）を引き継ぐからだという考えがあるが、一般のロシア人はそうは思っていない。モスクワ公国が引き継いだのはキーウ（キエフ）国家（後述）だ

と見なす。これが現在世界を騒然とさせる争乱の史的背景である。

ハザールはこのキエウ（キエフ）国家に十世紀の中頃攻撃され、征服されたトルコ系騎馬民の国である。征服されるに当たって、攻める側のキエウ（キエフ）国家と、守る側のユダヤ教騎馬民族国家ハザールの間で激烈な戦闘が繰り広げられたはずである。だから、民衆は憶えていたのだ。強壯なユダヤの騎馬武者を。最後にロシアの豪勇に敗れ去るユダヤの勇士を。

ハザールとは、以上のように現在のロシアのもとのもとにあつた国であり、民である。

ロシアの昔話におぼろな姿を現すこの国や民についてはあまり知られていない。知られていないというだけではない。わかっていないのだ。文献資料、考古学資料ともに不足し、全容がつかめない。ハザールはわからない所だらけであるという研究者がいる。

これから、今わかっていることをつなぎ合わせ、順次この国のことを語っていくつもりだが、話が断片的になったり、歯切れの悪い行文が続いたりするところができるかもしれない。資料の不足として許して頂きたい。

本書でつづる内容の概要をあらかじめここに記しておく。それにより、まず、ハザールのだいたいの像をつかんでおいて頂くために。

大国である

この国は最盛期とても大きな国であつた。中国にも知られていた。

唐（六一八—九〇七）一代の歴史を記した『新唐書』³には、「ホレズムは西北で突厥曷薩^{トウキョクカクサツ}に接する」（34：6247）とある。ホレズムとは、ウズベキスタン西部アム川下流のシルクロード観光で有名なウルゲ